P11-308

地域に看取りの知識をひらく
～『人のさいご』を活用して～

國居早苗[1)] 尾山直子[1)] 林瞳[1)] 神野真実[2)]

1)医療法人社団プラタナス 桜新町アーバンクリニック　2)株式会社メディヴァ

背景・目的

訪問する中で「自分のいのちが閉じていくとき、どのような変化が訪れるのかを知っておきたい」という声を多く聞き、病気や老いによって人が最期を迎えるまでに、心身にどんな変化が起きるかを知り、誰もが読めるような本を作りたいと思い制作した。
若いうちから「人のさいご」を知ることで自分らしく生きることを思考する機会を作りたいと考え、実現に向けての活動内容について報告する。

活動内容

対象者	人数	開催方式	主催
区民	39	朗読会 質問	地域包括支援センター
多職種	38	朗読会 グループワーク	地域包括支援センター
高校生	17	KJ法	高校
修道院	60	朗読会 分かち合いの会	修道会

感想

区民

「これから介護に携わる子供や孫たちに読んでもらいたい」

「漠然としていた最後の時を感じ取ることができて、不安がやわらいだ」

「人の死は誰にも必ず訪れる事ですが、どのような経過をたどるのかは知りませんでした」

「5人の介護をしましたが、気持ちの整理ができる思いです。その時の大変さで自分のこととして考えられませんでしたが、ゆっくり見つけていきたいと思えました」

「（本を読むことで）娘に話しておくことができます。娘が後悔しないですむようにしておきたい」

多職種

「人のさいごについて考える機会がなかったため、非常に勉強になりました」

「死について様々な捉え方があるので、それぞれの立場で読みたい。また、死の直前になって読む場合は心理的な拒否感が強くなってしまうので、もしもの時になる前から死について知り、考えておくことが大切だと感じました」

「周りとのつながりがない時代。誰もが迎える死だが、知らないから不安になるので、最期までの流れを多くの人に知ってほしい」

「核家族化がすすみ、人の死が身近でなくなり、むしろ避けるようになってきていると思う。子どもでも人は、だれもが“死ぬ“ことを、改めて知っておくことは大切だと思った」

高校生

「人生を、さいごまで自分らしく生きていくために、この絵本の内容を頭の片隅に入れておきたいと思いました」

「大切な人だからこそ後悔のないように“命のさいご”についてきちんと向き合う必要があるのだと思った」

「自分ごととして授業に参加することができたので、この知識や経験は将来のために大切にしたい」

「それまで一緒に過ごした時間が大切。毎日を大切に生きないとと思う」

「“人のさいしょ”は知ってるのに、“人のさいご”は知らないのに違和感がある。“一緒に過ごした時間が大切”。別れの瞬間をこわがらなくてもいいんだと思った」

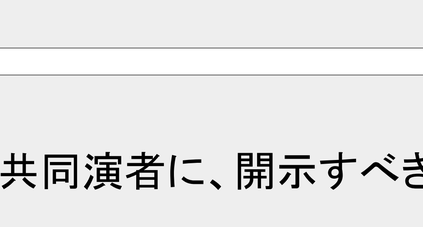
修道院（シスター）

「姉妹たちに寄り添うこと。知識を持って触れること。大切な姉妹をありのまま受け入れること」

「本の中にある『一緒に過ごした時間』が心に刺さった」

「最期の看取りはきれいごとではない。準備にどうするか考える」

「自分の置かれている立場、現実の問題を前もって知識として知れたことは良かった」



考察・まとめ

高校生のワークショップでは、「生」についての思考を深め「死」について語る場を提供できた。シスターの分かち合いでは、対話を積み重ねることによって具体的なアクションに結びつくような前向きな発言が見られた。区民の朗読会では「子供や孫たちにも読んでもらいたいと思います」という感想を寄せられた。
今後もこの活動を通じて「いのちがどう閉じられていくのか」という知識が広がり、地域全体で看取りについての理解が深まるよう期待している。
「いよいよになるもっと前から読んでおきたかった」「若い人でも手に取れる本がいい」という声もあり、中学生や高校生など若い世代にも、命や生き方について考えるきっかけを提供することが求められていると考える。

今後の展開

年齢や立場を問わず、多くの人が「自分事」として命の終わりについて考えられる機会や環境づくりが必要と考える。地域での朗読会、中学校、高校での「いのちの授業」やワークショップを開催することで、若い世代が命の大切さや自分らしい生き方について思考するきっかけを作ることができると考える。死についてオープンに話せる風土を地域で育て、世代を超えた対話や学びの場を広げていくこと今後も実践していきたい。

連絡先｜桜新町アーバンクリニック

COI
筆頭演者ならびに共同演者に、開示すべきCOIはありません